学位論文要約

インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の対照研究

― 表現方法と展開パターンに着目して―

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　日本語教育学分野

D192204　　MUTIA KUSUMAWATI

「ほめ」は相手のフェイスを脅かす場合に，フェイス侵害の度合を軽減する機能も持つ（Brown & Levinson，1987）。また，日本語の初対面会話では「ほめ」は重要な役割を担っていることが指摘されている。会話において「ほめ」を行う際，会話参加者はやりとりを行いながら「ほめ」を展開していく（熊取谷，1989；金，2004；2007；2012）。したがって，会話の中での「ほめ」の特徴を捉えるためには，会話参加者の相互作用を含む談話レベルで「ほめ」を捉える必要がある。

これまでの日本語における「ほめ」の研究では，一部の展開パターンが明らかにされたが，詳細な相互作用や展開については明らかにされていない。一方，インドネシア語においては，談話レベルで「ほめ」を扱った研究はない。以上をふまえ，本研究では「ほめ」の表現方法と展開パターンに着目し，インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の特徴を明らかにすることを目的とする。

日本語の初対面会話において「ほめ」は重要な役割を担っていると指摘されたが，初対面会話に関して行われてきた従来の「ほめ」の研究は，日本語における研究であり，他の言語にも類似の特徴が見られるかについては不明である。また，「ほめ」は相手への要求を間接的に伝える可能性があり，相手のネガティブ・フェイスを脅かす恐れがある。さらに，「ほめ」を行う際，相手に「返答しなければならない」という負担を与える。「ほめ」と「返答」の表現を同時に見ることで，当該言語における「ほめ」の実態がより明らかになると考えられる。

両言語の「ほめ」と「返答」の表現方法に相違点が見られる可能性がある。しかし，初対面会話における「ほめ」の表現方法の特徴や使用傾向についてはまだ明らかにされていない。また，先行研究では「ほめ」と「返答」を隣接ペアとして分析されてきたが，これまでの研究の分析対象は一つの隣接ペアにとどまっている。

「ほめ」の談話展開に関しては，日本語の初対面会話における「ほめ」の連鎖は部分的にしか明らかにされていない。また，インドネシア語では「ほめ」の展開パターンに関する研究は行われていない。「ほめ」を行う際に，ターンを取得して行われる「ほめ」（以降，「ターン有ほめ」）とターンを取得せずに行われる「ほめ」（以降，「ターン無ほめ」）がある（Goodwin，1986；吉田他，2009）。これらの存在については従来言及されてきたが，「ほめ」の機能という観点から，「ターン有ほめ」とどのように異なるのかについての分析は行われていない。また，「ほめ」が談話中のどこで用いられ，どのようなパターンを構築するかは，「ほめ」の意図や機能と密接に関わる。

以上をふまえ，本研究の研究課題およびそれぞれの研究課題を明らかにするための観点は以下の通りである。

研究課題 1　インドネシア語と日本語の初対面会話において,「ほめ」と「返答」はどのような表現方法で行われるか。(第 4 章)

研究課題 2　インドネシア語と日本語の初対面会話において,「対者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。(第 5 章)

研究課題 3　インドネシア語と日本語の初対面会話において,「第三者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。(第 6 章)

これらを明らかにするために,本研究では,インドネシア語母語話者と日本語母語話者の大学院生(各言語女性 5 組,男性 5 組)を対象にし,30 分程度の自由会話データを収集した。その後,音声データを文字化し,分析や考察を行った。

「ほめ」と「返答」の表現方法を明らかにするためには,まず,「対者ほめ」と「第三者ほめ」をそれぞれ「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」に分類する。次に,談話資料中に見られた「ほめ」と「返答」の表現を分類する。その上で,「ほめ」の表現や「ほめ」の対象がどのように「返答」の表現と関わるか,また談話が展開するにつれて「ほめ」と「返答」の表現方法が異なるかを分析する。最後に,分析結果を踏まえ,ターンの有無の観点から考察を行い,両言語における類似点と相違点を明らかにする。

その結果,「対者ほめ」に関しては,両言語ともに「評価」が最も多く見られるが,日本語の方が多い。また,インドネシア語においては,「事実指摘」の割合も日本語に比べて高く,インドネシア語では日本語に見られない「神様への言及」も観察された。

一方,「返答」はすべて「対者ほめ」に対する「返答」である。インドネシア語では「回避」が多く使用されているのに対して,日本語では「肯定」が多く使用されている。

「第三者ほめ」に関しては,　両言語において「評価」の使用割合が最も高い。日本語に関しては「評価」の偏りが顕著であることが両者を比較することで明らかになった。一方,インドネシア語では,インドネシア語では,「対者ほめ」で見られた「事実指摘」や「神様への言及」が「ターン有第三者ほめ」で見られることは少なく,特に「神様への言及」は 1 例も見られない。「ターン無第三者ほめ」が行われることは極めて少ない。また,「評価」と「感動詞のみ」の表現が使用されている。

続いて,「ほめ」の談話展開を明らかにするために,まず,談話のデータから「対者ほめ」が含まれる話題を抽出し,「ターン有ほめ」と「ターン無ほめ」に分類する。次に,それぞれの「対者ほめ」がどのような機能を有するかを分析する。機能の割合を算出し,そこから現れた特徴的な部分に着目し,その話題を「先行連鎖」,「本連鎖」,

「後続連鎖」に分ける。

その後，それぞれの連鎖に現れる展開パターンを分類するとともに，そこから現れた特徴的な部分に着目し，談話例をもとに分析する。最後に，それぞれの言語において「ほめ」はどのような時に，どのようなパターンで展開されるかを明らかにした上で，「ほめ」の機能の観点から考察を行なう。

その結果，「対者ほめ」に関しては，インドネシア語においても日本語においても「興味提示」としての「形式ほめ」が多く見られることがわかった。ただし，インドネシア語の「対者ほめ」では「実質ほめ」も使用されるのに対して，日本語の「対者ほめ」では「形式ほめ」が使用されることが明らかになった。

インドネシア語では，ほめ手が積極的に話題を維持する意図を持っている際に活用されるだけではなく，「ほめ」の前に，他の対象と比較することで，当該の対象が評価される。それに対して，日本語では，ほとんどの場合，ほめ手が積極的に話題を維持する意図を持っている際に活用される他に，受け手のターンを妨げることなく，関心を持っていることを示す際に活用されることも多いことが明らかになった。

「第三者ほめ」に関しては，インドネシア語で使用割合が最も高い機能は「自己フェイスの維持」であるのに対して，日本語では「興味提示」における「話題維持–あいづち」である。また，両言語ともに「興味提示」の「話題維持」が二番目に多く見られる。これらの「ほめ」の展開パターンを分析した。

インドネシア語では，自らのフェイスを維持するために，「ほめ」が行われることが大半である。その他に，「第三者ほめ」を行うことで，ほめ手はお互いに当該の話題に関する興味や知識を持つことが示されることも見られやすい。それに対して，日本語では，「ターンの有無」によって，「ほめ」を使い分けており，あいづちに似た「ターン無ほめ」が見られやすいことが分かった。

本研究の結果から，「ほめ」と「返答」の負担度が大きいため，自己主張を回避するために，「ほめ」は間接的な表現で行われ，本連鎖では「単独ほめ」や「単独ほめ–返答」のパターンが見られやすいと考えられる。それに対して，日本語では，「ほめ」は受け手に対する「共感」を伝えるために活用され，インドネシア語に比べて，ほめられたことによる相手の負担度が大きくないと言えよう。ここから，日本語における「ほめ」は直接な表現で多く行われる他，「肯定」の「返答」が見られやすい。また，本連鎖では，「連続ほめ」や「連続ほめ–返答」など「ほめ」が複数現れるパターンが見られやすいと考えられる。

本研究では，インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の表現方法と

展開パターンの特徴が明らかになった。両言語には相違点が見られたことから，インドネシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面において，「ほめ」の使用の違いによって，不快感や違和感が生じる恐れがある。そのため，円滑なコミュニケーションを行うためには，日本語教育現場において，本研究で明らかになったようなインドネシア語と日本語の違いをふまえた指導が行われることが求められる。